
キュートブラザー—修正・リメイク版—

佐川 悠味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キュートブラザー―修正・リメイク版―

【Nコード】

N 8 1 6 6 M

【作者名】

佐川 悠味

【あらすじ】

平凡な中学生、ツキノヒカル月野光に突然告げられた兄の存在。

ずっと兄弟に憧れていた光は胸を弾ませ、初対面の日を待っていた。

しかし、当日彼の前に現れたのは…

「改めて、兄の薫です！」

——美少女？

「目立ちたくない平凡な弟と、
一見美少女な兄貴の兄弟愛コメディ」

とうとうこの日がやってきた。

この三日間、どれだけ俺が楽しみに待っていたか

「俺に、兄貴ができる…！」

一人で呟いて、拳を握り締める。

…まあ、正確に言えば「兄貴がいた」だけど…

「俺に兄貴がいる…！？」

時はさかのぼること約三日。

「ええ…海外に行っててね。言わなくてごめんなさい」

母さんは少し申し訳なさそうに笑って、俺にそう告げた

別に言わなかったことに関しては何も感じない。

やっぱり言いだしにくかったんだろうってことは、中学生の俺でも想像がつく

…それはさておき。

「でもね…光、お兄ちゃん…」

「兄貴かあ…」

母さんが何かを言いかけた気もしたが、その時の俺には聞きかえす余裕なんてなかった

兄、兄貴…

きつと俺よりずっと背も高く、男らしいんだ

脳内にまだ見ぬ兄貴の姿を思い描く。

兄弟がいたらしてみたかったこと…

バカなこと言い合ったり、

くだらないことでケンカもしてみたいな。

いろいろと理想が浮かんできて、ただただ楽しみだった

——そして今日、その兄貴が俺の家にくる！

いや、よく考えてみたらここは兄貴の家でもあるんだから「帰ってくる」んだよな

とすると出迎えは「おかえり」か？

俺が緊張しながら考えごとをしていると、いきなり肩を叩かれた

「…！」

驚いて振り返る。

「光、緊張してる？」

母さんだった

ったく、ビビらせんなよ…

「…悪いかよ」

「別にいい」

照れる俺を見てニヤニヤと笑う。

それがまた恥ずかしくて視線を合わせられなかった

「ただ…光は会ったの、初めてなんだなあって思ってた」

その後小さく「お兄ちゃんに…」と呟いて、母さんは去っていく

「…そっだよ…」

俺は今中二で、兄貴が三学年上らしいから…

兄貴は高二か。

兄貴は俺が小学校低学年の頃に海外に行ったらしい

…けど、おかしいな…

俺には兄貴の記憶が全くない。

「小学校低学年」なら、

少しぐらい思い出があったっていいはずじゃないのか？

頑張っ て特によくない記憶力を働かせてみる。

たしかあの頃は、よく年上の女の子と遊んでた気が…

するような、しないような…

駄目だ。やっぱり俺、記憶力ない。

俺は一人、玄関で頭を抱える

どうしても思い出せない

何でだ？

…

いろいろ考えているうちに何だか面倒くさくなってきた、諦めが入る

まあ、直接会えば分かるだろ

思い直して時計を見る

今日は日曜。

時は午後三時前。

…もうすぐ約束の時間だ

兄貴は父さんが今泊まっている下宿まで迎えに行き、そこからこの家にくる、と母さんが言っていた

そういえば俺、外泊なんて小学校の修学旅行以来してないな…と、どうでもいいことを考えていた時だ。

ピンポン

玄関のチャイムが鳴る。

“きた！”

俺は勢いよく伏せていた顔を上げ、戸の方を見た

ゆつくりと、間をためるように戸が開く

そこにいたのは…

ショートカットでサラサラの髪、

モデルのように小さな顔に可愛らしい顔立ち、

爽やかにリボンのあしらわれたブラウスに合わせた、短めのジーパンから伸びるすらっと長い足、

身長もきつと俺より高い。

一瞬、空気が凍る

いや…見とれるほど可愛いけど、どちら様？

困惑する俺。

彼女はただ、そんな俺をじっと見ている

…そんな見られても困るんだけど。

「…いや、あの…」

俺が「誰ですか？」と続けるより早く、彼女の後ろから父さんが顔を出した

「…！」

待てよ？

父さんは『兄貴』を迎えに行っただろ？

父さんが彼女の肩を抱く

その父さんと一緒にいるってことは、

もしかして——！？

「あら。おかえり、お兄ちゃん」

いつの間にか横にいた母さんの一言で、俺の仮説は真実へと決定付けられた

「光、兄さんの薫だぞ」

父さんがいつも通り、陽気に笑う。

「あ、お兄ちゃんこれ光よ。久しぶりよね」

母さんが『お兄ちゃん』に俺の紹介をする

俺はこの時どんな顔をしていたのか分からない。

だけど恐らく、ものすごく間抜けな表情だっただろう。

『これ』呼ばわりされたことにもつつこめず、今度は別の意味で目の前の人物から視線を外せなくなっていた。

そして、

「改めて、兄の薫です！」

“お兄ちゃん”も笑って自己紹介を始めた。

「……」

いよいよこれが現実なのだと思います。

俺はただ固まることしか出来なかった

「光、挨拶は？」

母さんが小声で言い、腕を肘でつついてくる

しかし言葉が出てこない。

理想とのギャップに、嘘だと叫びたくなった

たった今、分かったことがある。

兄貴との思い出がなくて、女の子と遊んでいた記憶があつたのは多分、その“女の子”こそ、この“兄貴”だったからだ！

そうだ。

たとえば思い描いていたものと違ってても、この人が俺の兄貴なんだから、とりあえず挨拶…

「ってか、超かわいいー！！」

をつ！？

一瞬、何が起こったのかわからなかった。

サラサラと髪が俺の頬にかかる。

もしかして俺、抱きつかれてる！？

状況を理解し心臓が跳ねる。

これは確かに兄貴なんだけど、見かけは完全女の子だから…

普段あまり女子との関わりがない俺にはそれだけで嬉しいやら、そんな自分が嫌になるやら。

「君が光！？大きくなったねえー！」

俺の考えなど知らないだろう“兄貴”はそう言って、俺の背を軽く叩く。

…気分は悪くないな

でも本当だ。

胸、ないや…

リボン越しに伝わるのは柔らかい感触ではなかった。

当たり前なことに少しガツカリしていた自分がいる。

いや、偶然当たっただけだからな！

自分でも誰に言ってるのかも分からない言い訳をした所で、兄貴がやっと俺から離れた

「あ、ごめん。いきなり…」

我に返ったのか、しゅんとして俺を見る。

先ほどの明るい笑顔も美少女そのものだったが、しおらしい表情もまた可愛らしい。

「いや…」

俺が口ごもっていると、後ろから母さんが背中を叩く。

「とにかく奥に入りましょう?」

久しぶりに家族が全員揃って嬉しいのか、その顔はウキウキと楽しそうだ

「そうだな、久しぶりにゆっくり話そう」

父さんも便乗し、兄貴と俺の背中を押して台所へと誘導する。

兄貴は小声で「お邪魔します」と呟いていた。

…自分の家だろ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8166m/>

キュートブラザー—修正・リメイク版—

2011年10月7日15時59分発行